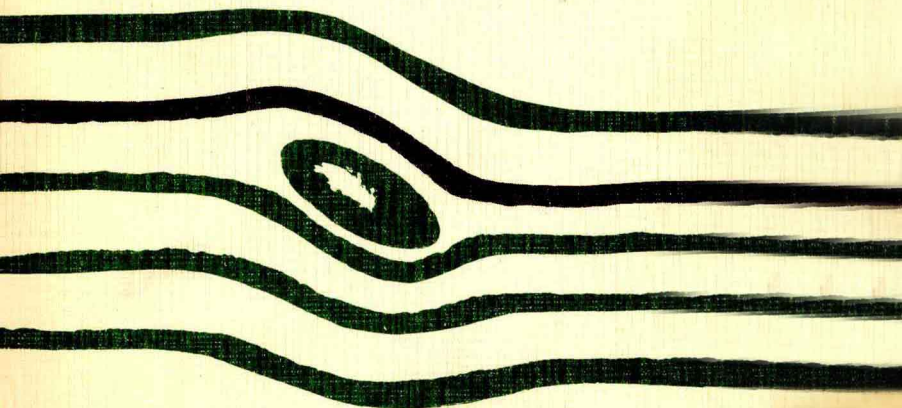


日本近代戦争文学史

— 透谷・漱石・花袋・伝治を中心に —

竹長吉正著

笠間選書 62



笠間書院

■著者紹介

竹長 吉正 (たけなが よしまさ)

昭和21年 福井県美浜町に生まれる

東京学芸大学卒業 大東文化大学大学院日本文学
研究科修士課程修了

現職 東京学芸大学附属高校大泉校舎教官

著書 『文学の視点』(昭和44年10月, 文学的試行
の会), 『水暦』(昭和45年10月, 文学的試
行の会) 他

現住所 ㊟346 埼玉県久喜市吉羽1950-3

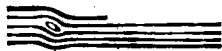
- 笠間選書62 日本近代戦争文学史
——透谷・漱石・花袋・伝治を中心に——
昭和51年8月15日初版第1刷発行
定価 1000円 一検印省略一
- 著者 竹長吉正
発行者 池田猛雄
印刷 大文社印刷所
製本 笠間製本所
発行所 有限会社笠間書院
〒101 東京都千代田区神田神保町1-46
電話 03-295-1331(代) 振替東京1-56002
- 書籍コード 1391-953062-0924

日本近代戦争文学史

透谷・漱石・花袋・伝治を中心に

竹長吉正著

笠間選書 62



笠間書院

序にかえて

日本の近代はいわば戦争の歴史である。明治二十七、八年の日清戦争、三十七、八年の日露戦争、大正三年から七年にかけての第一次大戦、昭和六年の満洲事変からはじまる、いわゆる十五年戦争としての日中戦争・太平洋戦争等のほか、最初の海外派兵としての征台の役以来、日本は数多くの対外戦争をひきおこしてきた。日本の近代文学を考えるとき、国民の精神・物質の両面にわたり、甚大な影響を及ぼすこの戦争の問題は避けることができない。

しかし、平和と民主主義の戦後においては、*「戦争」*は禁句であり、言及されるとしても絶対悪として断罪されるのみであって、文学との関係においても、ごく一部の作家・詩人の反戦・非戦的側面がとりあげられるにとどまっていた。戦争と近代文学の問題は、それ自体を直接主題として掘りさげられるということがほとんどなかったのである。近年になって、戦争文学全集等の企画もあらわれ、研究も緒についたかの感があるが、近代文学史の総体からみれば、まだまだこれからと言ってもよい。しかし、戦争は性急に全否定されたり、また、今日とくにこころする必要があるのだが、全肯定されたりするようなものであってはならない。とりわけ文学との関係においては、あくまで戦争を対象として見据えつつ作品の内部に立ち入り、時代に立ちかえて柔軟に考察される必要がある。

本書はその点、野心的な試みであり、労作であって、日本近代文学と戦争の問題を、歴史的

総体においてとらえ、作家論と作品論を通して展望しようとした著者の意図は、高い次元において達成されていると言つてよい。語り口は、なめらかで平易な感じを与えるが、著者の感受性はするどく、かつ柔軟であり、論理構築もすぐれていて、それぞれの章は、学界の批判にたえうる高さを保っていると言える。江見水蔭の「決死隊」の部分などをはじめ資料的な新しさも目につくが、とくに庄巻は夏目漱石の場合であろう。「吾輩は猫である」と戦争との関係を綿密に洗い、ケルト族の勇士オシアン（注）の詩の翻訳と「従軍行」・「幻影の盾」との相関を新しく解明し、「趣味の遺伝」に及ぶが、「草枕」などもふくめて「戦争」の視角を意識的に設定することに、作品の読みなおしが可能になっている点を重視したのである。

著者竹長吉正氏は福井・美浜の産で、若狭高校時代には創作コンクールで第一席を獲得したと仄聞しているが、東京学芸大学を経て大東文化大学大学院（日本文学専攻）に学び、小冊ながら『文学の視点』を刊行、大学院修了後も漱石論をはじめとして戦後文学にまで及ぶ研究をつづけてきている。年少のみみずしい感受性を保持しつつ、近代文学史に分け入って、新鮮な労作を世に問われたことはまことに同慶のいたりである。先行研究をふまえた独創は豊かであり、研究者から年少者まで、各層の広い読者を本書のために強く期待したい。

近代文学史と戦争の問題を重視する同行のひとりとして、いささか紹介のことばをつらねて序にかえたいと思う。

昭和五十年十二月二十一日

平岡敏夫

『日本近代戦争文学史』

——透谷・漱石・花袋・伝治を中心に——

目次

一 日清戦争と文学

(1) 『銀の匙』にあらわれた戦争

二

(2) 北村透谷の場合

三

(a) 「夢中の詩人」と「一点星」

三

(b) キリスト教・ナシヨナリズム・戦争

三

(c) 透谷と露伴

三

(3) 従軍記者国木田独歩

三

(4) 日清戦争を題材にした作品その他

四

二 日露戦争と文学

五

(1) 日露戦争への道程

五

(a) 高山樗牛と日本主義

五

(b) 社会主義者の非戦運動

六

(2) 木下尚江と『火の柱』

六

(3) 江見水蔭の『決死隊』

七

(4)	晶子と楠緒子の新体詩	七五
(5)	夏目漱石の場合	七五
	(a) 「従軍行」と本籍移し	七五
	(b) 漱石の戦後予想と現実の戦後	七九
	(c) 『吾輩は猫である』に見る戦争	七九
	(d) 『幻影の盾』と翻訳「オシアンの詩」	一〇一
	(e) 『趣味の遺伝』に於ける戦争の描き方——庶民の視座からとらえた戦争——	一〇五
	(f) 『草枕』に於ける警鐘	一一三
	(g) 『三四郎』と戦後世相	一二五
	(h) 『こゝろ』に見る戦後の国民精神——先生の「淋しさ」と乃木殉死——	一三三
	(i) 『点頭録』に見る漱石の戦争観	一四七
(6)	森鷗外と『うた日記』	一五九
(7)	田山花袋の場合	一六六
	(a) 『第二軍従征日記』の真実	一六六
	(b) 作家としての成功と『一兵卒』の価値	一七五
	(c) 『田舎教師』と戦後の雰囲気	一八三
	(d) 『一兵卒の銃殺』に見る戦争	一八六

(8)	日露戦争に取材した作品その他	一九七
(a)	作品補遺	一九七
(b)	歌謡——「蟬坊の歌と「戦友」——	一九九
三	シベリア出兵・山東出兵と文学	二〇五
(1)	時代概況	二〇七
(2)	中国民衆の痛みと片山敏彦の良心	二一〇
(3)	黒島伝治の場合	二一五
(a)	作家としての輪郭及び農民文学について	二一五
(b)	軍隊日記と「シベリアもの」	二一九
(c)	「反戦文学論」と『武装せる市街』	二三三
	主要参考文献一覧	二二九
	日本近代戦争文学史年表	二四三
	表紙に見る時代と戦争 写真解説(口絵)	二六三
	あとがき	二六七

一、日清戦争と文学

(1) 『銀の匙』にあらわれた戦争

中勘助の『銀の匙』は、一步一步人生に目ざめていく幼少年期の微妙な心情を描いた、すぐれた自伝的作品である。

その後篇の「二」に、次のような文章がある。

それはそうと戦争が始まって以来仲間の話は朝から晩まで大和魂とちゃんちゃん坊主でもちぎっている。それに先生までがいっしょになって、まるで犬でもけしかけるようになんぞといえは大和魂とちゃんちゃん坊主をくりかえす。私はそれを心から苦々しく不愉快なことに思った。先生は予譲や比干の話はおくびにも出さないでのべつ幕なしに元寇と朝鮮征伐の話ばかりする。そうして唱歌といえば殺風景な戦争ものばかり歌わせておもしろくもない体操みたいな踊りをやらせる。それをまたみんなはむきになって目のまえに不倶戴天のちゃんちゃん坊主が押し寄せてきたかのように肩をいからしひじを張って雪駄の皮の破れるほどやけに足踏みをしながらむんむんと舞いあがる埃のなかで節も調子もおかまいなしにどなりたてる。私はこんな手合いと齡するのを恥とするような気もちで、わざと彼らよりは一段高く調子はずして歌った。またたださえ狭い運動場は加藤清正や北条時宗で鼻をつく始末で、弱虫はみんなちゃんちゃん坊主にされて首を

切られている。町をあるけば絵草紙屋の店という店には千代紙やあね様つくしなどは影をかくして至るところ鉄砲玉のはじけたならしい絵ばかりかかっている。耳目にふれるところのものなにもかも私を腹立たしくする。ある時またおおぜいがひとつところにかたまってきたきかじりのうわさを種にすさまじい戦争談に花を咲かせたときに私は彼らと反対の意見を述べて、結局日本はシナに負けるだろう、といった。この思いがけない大胆な予言に彼らはしばらくは目を見合わすばかりであったが、やがてその笑止ながら殊勝な敵愾心てきがいしんはもはや組長の權威をも無視するまでにたかぶってひとりのやつはぎょうさんに

「あらあら、わりいな、わりいな」

といった。他のひとりにはげんこでちょいと鼻のさきをこすってみせた。もうひとりは先生のまねをして

「おあいにくさま、日本人には大和魂があります」

という。私はより以上の反感と確信をもって彼らの攻撃をひとりでひきうけながら

「きつと負ける、きつと負ける」

といいきつた。そしてわいわい騒ぎたてるまんなかになすわりあらゆる知恵をしぼって相手の根拠のない議論を打ち破った。仲間の多くは新聞の拾い読みもしていない。万国地図ものぞいてはいない。史記や十八史略の話もきいてはいない。それがためにとうとう私ひとりにいいまくられて不承不承に口をつぐんだ。が、鬱憤うつげんはなかなかそれなりにはおさまらず、彼らは次の時間にさっ

そく先生にいいつけて

「先生、□□さんは日本が負けるっていいいます」

といった。先生はれいのしたり顔で

「日本人には大和魂がある」

と、いつものとおりのシナ人のことをなんの口ぎたなくのしつた。それを私は自分がいわれたように腹にすえかねて

「先生、日本人に大和魂があればシナ人にはシナ魂があるでしょう。日本に加藤清正や北条時宗がいればシナにだって関羽かんうや張飛ちやうひがいるじゃありませんか。それに先生はいつか謙信けんしんが信玄しんげんに塩を贈った話をして敵を憐れむのが武士道だなんて教えておきながらなんだってそんなにシナ人の悪口ばかりいうんです」

そんなことをいって平生のむしゃくしゃをひと思いにぶちまけてやったら先生はむずかしい顔をしてたがややあって

「□□さんは大和魂がない」

といった。私はこめかみにびりびりとかんしゃく筋のたつのおぼえたが、その大和魂をとりだしてみせることもできないのでそのまま顔を赤くして黙ってしまった。

忠勇無双の日本兵はシナ兵と私の小ざかしい予言をさんざんに打ち破ったけれど先生に対する私の不信用と同輩に対する輕蔑けいべつをどうすることもできなかった。

(注1) 共に中国の史書『史記』の中に出てくる人物。予讓は戦国時代晉の刺客。智伯に仕え、後、主の仇をうつ。比干は殷の紂王の臣。紂王を諫めて殺される。

(注2) にくみ、うらみの深いこと。

かなり引用が長くなってしまったが、ここには、めざめたひとりの子どもが、不合理な戦争の雰囲気腹を立て、友だちを軽蔑し、はては、先生をも信用しなくなる経緯がくわしく描かれている。

「大和魂とちゃんちゃん坊主」の話でもちぎりの友だち。それをけしかけるかのような先生。そして、学校の教育。唱歌にしろ、体操にしろ、すべて戦争色をおびており、主人公の「私」はおもしろくなく、わざと調子はずして歌ったりする。町を歩いても、戦争の絵ばかりが目につく。国をあげての戦争ムードの中で、「私」は次第に反抗的になり、「日本はシナに負けるだろう」と予言する。先生は「日本人には大和魂がある」から負けなと言いい、シナ人のことを口ぎたなくのしる。結局、戦争は日本が勝った。だが、「私」には、先生に対する不信感と友だちに対する軽蔑の念が根深く残ったというのである。

ここで取りあげられている戦争とは、言うまでもなく、一八九四(明治二十七年)年の八月から始った日清戦争をさしている。

国内市場で発展できない日本の資本主義は、市場をアジア大陸にと求めた。

また、国内には大工業の発達のかげに、様々な社会問題が発生した。高島炭坑夫虐待事件(一八七四年)を始めとして、横山源之助の『日本之下層社会』にみるように、国民は決してゆたかでなく、

近代工業の作りだしたものを買う余裕すらなかった。

国内には、様々な矛盾と不平がうずまいていた。そうした矛盾と、国民の不平不満のはこ先を海外に向けることで、これらを一挙に解決しようとしたのがこの戦争の正体だったと、後世の歴史家は解釈している。

しかし、日清戦争をもう一つ別の角度から眺めることも重要である。今まで述べた日清戦争観は後代の歴史学者がそのように原因・結果と跡付けたまでのことであり、それは決して当時の状況を正確に汲みあげたものと言えない部分もある。

今、私の手元にある当時の雑誌を読みると、日清戦争を機として文運の大いに隆盛したことなどや、戦争によって国民は「皆な活動的精神に満ち」、「国民的自覚心」を起こされ、日清戦争は結果として良いものをもたらしたという考えが記されているからである。

この雑誌は、『太陽』の臨時増刊で第十五巻第三号(明治42・2・20、博文館)、「明治史第七編・文芸史」という題の特集である。^(注1) 明治四十二年の時点で、過去四十一年間の文芸史を七編に分けて総括し、かつ今後の文芸を展望しようとした意欲的な企画である。「第一編 混沌世界」「第二編 思想界の変遷」「第三編 小説及び評論壇」「第四編 新体詩界」「第五編 短詩界の大勢」「第六編 演劇界」「第七編 新聞及び雑誌」。

こうした各部門ごとの内容が、現在定説となっている文学史とかなり食いちがっていたり、また評価の上や作家・詩人の取りあげ方の上で極めてユニークなものを含んでいた^(注2)りして、明治文学史の再